

「明暦検地帳」その後

七尾 美彦

明暦二年（一六五六）の検地帳については、『弘前大学国史研究』五十六号（昭和四十五年）に「黒石藩明暦二年の検地帳をめぐって」を書き、弘前高校の『鏡陵』七号（昭和五十一年）に「明暦検地帳再論」（以下、「再論」と略す）を書いた。

「再論」を書き上げた時点で、明暦検地帳のこともう書くことはあるまいと思っていたが、昭和五十六年の藩政史研究会（第十二回）で、明暦検地帳について報告し、長谷川成一弘前大学助教授と「物成」のことで意見を交換してから、また見直す気になった。

昨年从今年にかけて、いくつか補足・訂正すべきことを見出したので、この場を御借りして私見を述べさせていただくことにする。

一、明暦検地帳の特徴

明暦二年から三十年後に、貞享の新検に基づいて「御検地水帳」が作成されたが、それとの違いをまとめてみると、次の四点かと思われる。

①作物名を記している。

②米以外の高は「物成」と記されている。

③田位・畑位に関係なく米は反当一石三斗、米以外は反当三斗前後の高である。

④地方知行制が見られる。

作物名を記載するのは、この時期の検地帳の特徴のようで、八木橋文庫の明暦三年（一六五七）の「惣検地之表知行帳」にも粟やたばこの記載が見られる。

二、作物の種類

「再論」を書いた時点では、作物の種類は、米・粟・稗・そば・大豆・小豆・大根・なす・苳・麻・たばこ・長命草などしか確認できなかったが、その後の見直しで、麦（狩場沢村御蔵打分御検地之帳）、あい（黒石派町惣検地之帳）、いも（御蔵山形村打分御検地之帳）の三つの作物が見つかった。「再論」に「芋類は見えない」と書いたのは間違いであったことになる。

三、「物成」について

長谷川助教授が「物成検地帳」だと言われたように、この検地帳では、米以外の高を表わすのに「物成〇石〇斗」という表現をしている。「再論」では「米は収穫高で、畑作物は年貢高なのか。そのような混乱した記載がありうる筈はない。」「米の場合と同様に収穫高と見るべきである。」と書いたのだが、長谷川助教授から年貢高ではないのかと言われ

て調べ直してみた。

「物成」が年貢高か収穫高かという問題に解決の緒を与えてくれたのは、元禄二年（一六八九）の「黒石平内巳年郷帳」（市立弘前図書館蔵）である。この郷帳では、田方の場合「三百歩耆反ニ付耆石三斗代積を以地面上中下位石盛積合平均高如此」（傍点筆者）となっており、畑方の場合も「三百歩耆反ニ付三斗代積を以地面上中下位石盛積合平均如此」（傍点筆者）となっている。田方の一石三斗、畑方の三斗は、正しく明暦検地帳の一反歩当りの高なのである。それが、この郷帳では石盛と明記されている。

この郷帳は、明暦検地帳から三十年を経ているが、明暦検地帳の「物成」の高が畑方の石盛であることを示唆しているように思われてならない。

一石三斗の高は、貞享検地帳の黒石近辺の村では上田の斗代に相当し、三斗の高は下畑の斗代に相当する。

田位を無視した一石三斗の石盛と六ツ取りは、かなりきついように思われるが、検見引きがあって、村高に対しては五ツ取りになっていることがこの郷帳に見えている。さらに、元禄七年（一六九四）の「検地覚」（『津軽黒石藩史』）によれば、黒石領では、一間〓六尺五寸の古検の竿を使用しているので、この面でも緩める措置が取られていたことがわかる。

四、検地帳に見る黒石開町の実相

検地帳の作人の右肩に町名が記されているのに気が付いたのは最近で

ある。それまで何回か見てきたのに、関心を示さなかったのはうかつであった。

私の書いたものも含めて、従来の説明は、初代津軽信英が陣屋を築造し、町割を行なったということだけで、町割の実相については全く触れられてこなかった。「妙経寺記録」が唯一の史料であったのである。

「妙経寺記録」の明暦二年の条には、黒石陣屋の地鎮祭が行なわれたことが記しており、万治三年（一六六〇）の条には、明暦二年以降のある時期に町割がなされたことが記されている。したがって、町割が行なわれたことは否定できないことであるが、ゼロの状態から町づくりを始めたかどうかは、「妙経寺記録」だけでは解明できないことであった。

(1) 検地帳に見る町名

町名を記載している検地帳は「十郎左衛門様御知行打分 黒石村諸給人惣検地之帳」で、日付は明暦二年六月二十八日になっている。明暦二年の上半期の段階で、十一の町並（古町・本町・おいた町・下町・上町・横町・寺町・浦町・新八町・派町・徳兵衛派）が出来てしまっているわけである。

さらに、同じ日付の「上黒石村御蔵御検地之帳」には、「町人〇〇」という記載が割と多く見られる。我々の予想した時期より早い時期に、町の半分が既にあったわけである。

「封内事実秘苑」によれば、信英分知の決定があったのは明暦二年二月、信英が江戸から弘前に到着して執政にとりかかるのは四月というこ

となので、黒石陣屋の地鎮祭は四月以降と思われる。町割の方も、早く見ても四月以降ということになる。

派町や徳兵衛派などの「派」のつく町は、明暦二年頃にできた町並であるとしても、「派」のつかない古町や本町などの九町は、それ以前からの町並と思われる。信英の行なった町割は、以前からあった古い町並に、侍町や職人町や新たな商人町を継ぎ足したものと解される。

黒石陣屋が、かつて黒石館があった境松に築造されないで、現在の内町一帯に築造された理由は、古い町並とこれからつくられてゆく新しい町並の中間の地点にあたっていることを見れば、容易に理解できるであろう。

(2) 信英分知直前の黒石村

明暦二年以前に、いくつかの町並が存在したとしても不自然でない背景を見てみたい。

『黒石地方誌』にある「慶安年間の絵図」によれば、黒石村は三一四軒で郡中随一の大村である。大村になった原因としては、慶長二年（一五九七）の浅瀬石城下の焼亡と、黒石への移住ということも考えられる。

次に、黒石の寺院の開基を見てみると、明暦以前の開基になっている寺院が五つある。『新撰陸奥国誌』や『烏城志』によれば、来迎寺（正保元年 一六四四）、感随寺（正保四年 一六四七）、保福寺（慶安元年 一六四八）、地藏院（承応元年 一六五四）、妙経寺（承応元年 一六五四）などで、いずれも明暦の少し前の正保・承応年間である。

津軽十郎左衛門信英は、寺が五つもある大村に分知してきたわけである。黒石村とか上黒石村とか村名になってはいるが、実体としては、柏木町村のように、黒石町村とでも言うべき状態であったのではあるまいか。

(3) 町の形成

『津軽一統志』によれば、慶長七年（一六〇二）、津軽為信は孫の大熊と共に、黒石館で多年を過ごしていた。為信の居た黒石館は、現在「旧黒石城跡」の碑の立っている境松であることは、天和四年（一六八四）の境松村の絵図や土壇の跡などから確かであろう。

この黒石館は、慶長十五年（一六一〇）、弘前築城に際してその資材に使われて廃城となった（『永禄日記』）。

これらの事実を基に考えてみると、慶長年間、境松の黒石館を中心にいくつかの町並が形成されていたと想定することは、それ程無理なことではない。

慶長十五年の黒石廃城によって、町並もなくなっただろうか。浅瀬石城下のように、城とともに焼亡したわけでもないのに、町並の方は存続したということもあり得る。

明暦検地帳に見える町名の中に、境松に近い西側の町名がいくつか見られるということは、やはり黒石館との関連で解釈した方がよいと思う。

（弘前高等学校教諭）